山田研究

地域文化の記録

姶良市山田の歴史，民俗，芸能，暮らし

姶良市山田の歴史，民俗，芸能，暮らし

山田研究

地域文化の記録

姶良市立山田小学校

発刊にあたって

教育は地域の実態に即して行われなければならない。そのために先ず地域の実態を知ることが必要である。山田には山田の歴史があり、地理がある。長所もあれば、短所もある。これを無視しては教育はできない。

昭和３９年１０月１５日に山田小学校が刊行した社会科資料「**やまだ**」に、山田小学校長（当時）の細山田武道氏によって書かれた序文の冒頭の一文です。

それから５０年が経ったわけですが、当時の山田小学校の職員が夏休みを利用し、聞き取り調査や資料の研究に邁進した汗の結晶である「やまだ」の資料的な価値は、少しも色褪せることがありません。いや、それどころか当時収集された山田校区の民俗や伝説などは、今となっては失われたものも多く、一層その貴重さを増しているのです。

当時、職員の中心となり「やまだ」の研究・執筆を担われた松永守道氏が、「さらに第二集、第三集と改訂するごとに、より立派な正しいものとなることは間違いない。」と述べられているのですが、残念ながらこれを超えるものが、山田小学校職員によって作成されることはありませんでした。

それほど「やまだ」は優れたものであったわけですが、時を経たことによって、例えば表記・表現上変更が必要な部分が生じていました。また、当時は経費の関係で写真の掲載が見送られました。さらに、破損や紛失により山田小学校に残されていたのは１冊のみという状況がありました。

しかし、一方では郷土教材に学ぶ学習の必要性は高く、ふるさとに学ぶための学習資料を求める声は高かったのです。そこで、山田を学習するための資料として編まれたのがこの山田研究です。５０年前に編まれた「やまだ」には遠く及ばないにしても，この資料をもとに山田の子どもたちがふるさと山田について学び，成長した後に郷土のために活躍してくれることがあれば、これに過ぎる幸せは無いと考えます。

山田研究　　目次

刊行にあたって　２
目次　３
山田のはじまり　４
黒島神社　５
黒島神社田作りの神事　７
黒島どんと老神どん　９
山田城　１０
梅北国兼　１２
棒踊り　１３
山田の郷土芸能　１５
中津野用水路　１７
上名用水路　１９
宇都川用水路・山崎用水路　２０
外城制度と郷士　２１
門割制度　２３
帖佐松原の鬼火　２４
蛇塚　２６
大戸翁　２７
住吉池と浜石門　２８
西田の田の神　３０
石敢當　３１
一向宗の禁制と隠れ念仏　３２
廃仏毀釈　３４
城光寺の泉水　３６
山田と薩英戦争　３８
地租改正　４０
山田小学校　４２
西南戦争　４４
西郷隆盛の腰掛け石　４６
西南戦争招魂碑　４７
西田野町　４８
日清戦争　４９
日露戦争　５０
凱旋門　５１
興文館　５２
弘道舎　５３
昔の医療　５４
山田の病院　５５
山田の昔の町　５６
山田の商工会と祇園祭　５７
客馬車　５９
山田橋　６０
太平洋戦争と山田　６１
山田中学校　６２
門松　６３
鬼火焚き　６５
七草雑炊　６６
３月節供，春の彼岸　６７
山田川鮎の石焼き　６９
お盆　７０
十五夜・綱引き・相撲　７２
山田の里かかしまつり　７３
田の神　７４
講について　７５
山田の歴史年表　７９
参考文献　８１

山田のはじまり

今から１３００年ほど前に，福岡県志賀島より鈴木三郎政氏という人が帖佐の住吉に移り住んだそうです。そして，その弟の四郎政良が，山間の土地を切りひらいて田や畑をつくったのが，山田のはじまりだといわれます。（山と山の間にある田）

鈴木政良は，黒島神社を建てた後に，黒島神社の近くに屋敷を建てて住み，その場所を宮牟礼と名づけました。黒島神社北側市道の急な坂を「宮牟礼坂」というそうです。（牟礼＝山・丘）

当時は，有力者（社会で力をもった人）が荒れ地などを切りひらいた土地を自分の領地としました。これを「名（みょう）」といいます。「上名」「下名」の地名は，鈴木氏の「名」のうちそれぞれ上手と下手をさしたものと考えられます。

写真は上名黒瀬にある黒島神社の周辺

くろしまじんじゃ
黒島神社

上名黒瀬にあります。７０８年（和銅元年）２月２９日，鈴木四郎政良によってたてられたと伝えられています。祭っている神様は宇佐明神，大名持命，少名彦名命，多祇留姫，多祇津姫です。

昔は，「郷社」といって山田校区すべてを守る神社とされ，１７１８年（享保３年）に寄進された石灯籠や１７８４年（天明４年）に造られた石橋などがあります。

毎年２月下旬の例祭では，お田植祭り，かぎ引き神事，上名棒踊りが行われます。

写真は黒島神社の拝殿

石橋

多祇留姫と多祇津姫は，天照大御神が須佐之男命の剣から生んだ３人の女神のうち２人で，福岡県宗像大社で祭られている海の安全を守る神様です。

山に囲まれた山田に，どうして海の神さまが祭られているのか不思議に思えるのですが，黒島神社を創建した鈴木四郎という人が，福岡志賀島から移り住んできたことと関係があるのかもしれません。

一番始めは，山の頂上に本殿があったのですが，１７０９年６月１日，山しお（やまくずれ）で水が湧き出し，山がくずれて，神社もおし流され，そのとき，昔からの記録や宝物もなくなったそうです。けれども，神体だけはしっかりと山中に残っていて，少しもよごれていませんでした。そのため，村の人たちは，ますます黒島神社の神様をうやまって，山の中腹（山の頂上と麓の間）に本殿を，山のふもとには拝殿を建て直しました。さらに，その約２００年後の１９１３年（大正２年）に社殿が今のところに移されました。

三国名勝図会「黒島神社」

黒島神社お田植え祭り

黒島神社では，春の例祭日にお田植え祭りが行われています。

まず氏子の中から２０人の人たちが，はだし，たすきがけで神社の前の広場に勢揃いします。次に，この広場を田んぼに見立てて木で作ったくわで田を耕す動作をします。そして，二股になった樫の木で作った「雄かぎ」「雌かぎ」を組み合わせて引き合い，地ならし（代かき）をします。この時，引き合いに勝ち負けはありません。雄かぎが雌かぎを鳥居の方へ引いていきます。その後，神官がニワトコの新芽と種籾（稲の種）を混ぜたものを広場へまきます。ニワトコの新芽は「かしき（草木の葉を土にまぜて肥料にするもの）」に見立てたものです。

黒島神社のお田植え祭りでは，苗を植えるのではなく，直接種籾を蒔くという古い農業の方法で行われるのが特徴です。

その後で「上名棒踊り」が奉納されます。昔は「田の神舞」や相撲なども行われ，たくさんの人々が集まってたいへんな賑わいだったそうです。

このお祭りは，いつ頃から始まったという何の記録もありませんが，黒島神社がつくられた和銅の昔（７０８年）から，毎年欠かさず続けられて来たと言われています。

黒島神社のお田植え祭りは，市指定無形民俗文化財です。

木でつくったクワで田を耕す。

雄かぎ（左）と雌かぎ（右）で引き合う。

雄かぎの方へ引いていく。

ニワトコの新芽と種籾

神官が種籾をまく。

上名棒踊りの奉納

広場の全景

黒島どんと老神どん（伝説）

昔，黒島どん（黒瀬）と老神（中津野）が，住吉池をどちらのものにするかで争いをしました。そこで，二人は日時を決めめて出発し，早く住吉池についた方が池を手に入れるという約束をしました。老神どんは近いので牛，黒島どんは遠いので馬で行くことになりました。

黒島どんは，「なあに，老神は牛だ。いくら近くてもおれの馬には勝てないだろうよ。」と，途中で馬も休ませ，自分もゆっくり遊んでいました。ところが，池に着いてみると，もう老神どんは先に着いているではありませんか。そういうことで，住吉池は老神どんのものということになったのです。

腹が立ってしょうがない黒島どんは，帰り道に乗ってきた馬を鞍をつけたまま山田川の渕に落とし，まとわりついてきた自分の子どももぽいぽい蹴飛ばしました。この馬や子どもたちが飛んでいった所が，豊留や東餅田で，ここに早馬神社や子烏神社が始まったといいます。また，馬を落とした渕を白鞍渕といい，上名と下名の境である羽田ノ越の下の渕がそれです。

写真は住吉池

山田城

今から約５００年ほど前の戦国時代，世の中の政治やきまりは乱れ，日本各地で領地をめぐる激しい戦いが続いていました。領主たちは敵に攻められることに備え，険しい山などを利用して多くの城を築きました。山田城もその一つです。

１５２９，祁答院領主の祁答院重武は，そのころ島津氏のものだった帖佐地方（山田を含む）を手に入れようと考え，不意に帖佐の平安城をおそって攻め落としました。そして，その翌日には山田城にも攻撃をしかけました。山田城には島津貴久が城主にした川越民部左衛門重博という武将がいました。しかし，１日間の戦いで山田城は落城してしまいます。

１５５４年，島津氏は，蒲生氏との激しい戦いの末に重富の岩剣城を攻め落とします。そして，翌年の１５５５年，山田城を奪い返し，さらに帖佐平安城の祁答院良重を破って帖佐地方を取り戻すことに成功します。

写真は山田城があった一帯（奥の方の山々）

その後，山田城は，蒲生氏との戦いにおける島津方の重要な基地として使用されますが，島津氏が支配する地域が広がり戦場が遠ざかると，役割を失っていきました。

ところで，山田城の周りには城にちなんで名付けられた地名があるので紹介します。

菖蒲ヶ迫　川越民部左衛門が戦死し，山田城が祁答院氏のものになった時に勝負がついた所が「菖蒲ヶ迫」であるといいます。

莢ノ口　祁答院重武が兵を大山に集め，この地で一斉に抜刀（刀を抜くこと）させました。鞘から刀を抜いたために後に「サヤン口」と呼ぶようになったという説があります。

花立　城から板ノ口に通じる道路の城寄り付近の地名です。南側に断頭ヶ岡と呼ばれる小高い丘がありますが，その丘で昔戦いに敗れた大将が首を切られたので，花を手向けたことから花立と呼ぶようになったそうです。

坊主落とし　きまりを破った僧（お坊さん）の処刑の場であったといわれます。高さ７０～８０ｍの断崖で，敵を防ぐために山を掘り割った空堀の一部であるのかもしれません。

また，城の城山は，昔から鎮西八郎為朝の城といわれ玉城山と呼ばれています。為朝は，平安時代の人で源頼朝や義経の叔父にあたり，武勇に優れ，特に弓の名人として有名です。鎮西（九州）各地を武力で従え，鹿児島にも勢力を伸ばしていました。実際には，山田には来ていないようですが，為朝にまつわる伝説がいくつかあります。

うめきたくにかね
梅北国兼

梅北国兼は，戦国時代の武将で，島津家の家来です。蒲生氏との戦いに手がらがあり，山田の地頭になりました。そして，北山に城を築いて山田一帯を治めました。

１５９２年（文禄元年），文禄の役に際し朝鮮へ移動中，反乱を起こし，豊臣秀吉を殺す計画を立て，熊本葦北の桟敷城を攻め取りました。これを「梅北一揆」といいます。

一揆に加わる軍勢は２０００人にもなりましたが，反撃に遭い梅北国兼は死亡しました。だまし討ちにあったといわれます。

豊臣政権への反乱という大事件に，豊臣秀吉は非常に腹を立て，梅北一揆と関係しているとして，秀吉にかねてより反抗的であった島津歳久（島津義久の弟）を殺させました。

かつて梅北国兼が地頭であった山田では彼に同情する人々が多く，死んだ後は北山に神として祭られました。

写真は北山にある梅北神社

棒踊り

棒踊りは鹿児島県の代表的な民俗芸能の一つで，離島を含む県内のほぼ全域と近接する宮崎県，熊本県の一部に分布しています。

男子青年が浴衣や絣の着物にたすきがけで，白はちまきを締め，三尺棒や六尺棒，鎌などを激しく打ち合わせて踊ります。

江戸時代の初め頃において，ある人物が（おそらく山伏であろうといわれます。）武道の棒術の型を研究して棒踊りをつくり出し，鹿児島神宮（国分八幡宮）の御田植祭で奉納踊りされたものが，爆発的に広まったと考えられています。

勇壮で激しく，曲芸的な棒踊りの動きは，示現流や浅山流という棒術の実際の技をうつしたものです。時代が下り南九州の各地で踊られるようになると，虚無僧踊りや長刀踊りなど多彩な波及型が生まれ，ますます人々に親しまれるようになっていきました。武を尊ぶ鹿児島の人の気質にも合っていたためでしょう。

もともと農業と関係が深い芸能であるため，やはり各地のお田植え祭りで奉納されることが多いようですが，秋の収穫を祝うお祭りで踊るところもあります。唄の歌詞は，地域によって違いがありますが，「おせろが山で前は大川」「焼け野のキジは山の背にすむ」など古い『御田唄』の断片らしきものを含んでいます。

山田地区には，上名棒踊りと下名棒踊りの二つがあります。

上名棒踊りは，六尺棒を使う力強さや激しさに特徴のある踊りです。江戸時代の終わりに上名の用水路が大水で壊れたことがありましたが，その修理のために雇った串木野の技術者の三左衛門という人から教わったという伝承があります。

下名棒踊りは，三尺棒と鎌を使う動きの速い華やかな踊りです。山田小学校の子どもたちが踊りを受け継ぎ，毎年秋季大運動会で，保護者や地域の方々の前で踊っています。

下名棒踊り

上名棒踊り

山田の郷土芸能

鹿児島県内にはあちこちに太鼓踊りがありますが，山田にも太鼓踊りがありました。山田の太鼓踊りの由来として，こんな話が伝わっています。

島津義弘が江戸に行った時，ちょうどコレラがはやっており，江戸の人々はこれを鎮めるために念仏踊りをしていたそうです。義弘は「これはよい。われらが朝鮮の役に出た記念の踊りとして薩摩に伝えよう。」と山田の池田と加治木の牧之瀬を呼んで，この踊りを習い身に付けるようにいいつけました。二人は熱心におぼえ，やがて帰国することになりましたが，不幸にして，牧之瀬は病死してしまいました。池田は帰国すると，山田に近い，加治木の西別府の農民たちにこの踊りを習わせました。これが太鼓踊りのはじまりであるそうです。

山田の太鼓踊りは今から明治時代の中頃までは踊られていたそうですが，残念ながら途絶えてしまいました。

写真は加治木の太鼓踊り

疱瘡踊りは，山田に今も踊り継がれている郷土芸能です。

疱瘡とは天然痘のことで，現在では種痘という予防接種によって防ぐことのできる病気です。しかし，昔は死亡率が高く，いったん流行すれば大勢の死者が出たために，人々に恐れられていました。そのため，疱瘡にかからないように，またかかっても症状が軽く済むようにと，寺や神社にお祈りをしたり，踊りを奉納したりするものでした。

山田奈良袂の池田千兵衛尉は太鼓踊りの創始者ですが，二代千兵衛尉も歌や演奏が好きで，鹿児島から「すてな」という音曲の女性の師匠（先生）を招き，自宅に住まわせていたそうです。そのすてなが教えたというのが下名の疱瘡踊りです。

上名黒瀬には金山踊りがあります。上名棒踊りが激しい踊りであるのに対して，緩やかな動きの金山踊りは女の踊りといわれます。衣装や道具が美しく華やかであるのもそのせいでしょうか。１１月初旬に行われる上名地区の運動会で披露されています。

写真は疱瘡踊り

写真は上名黒瀬の金山踊り

中津野用水路

今から２５０年あまり前，川より高い土地にある中津野は，水田に水を引くことが難しく，米が思うようにつくれないところでした。その土地の人々のまずしいくらしぶりを見て育った当時１５歳の少女ゆきえは，どうにかして用水路をつくり水田をつくることで，ふるさとを豊かにできないものかと考えていました。

ある日，ゆきえは山田川を見下ろす女生嶽という山に登りました。ここは蒲生，山田，中津野などの景色が手に取るように見える場所です。ゆきえはある考えを思いつきました。「そうだ，中津野の上流にある山田で川をせき止め，そこから用水路をほれば，川よりも高い土地にある中津野にも水が引ける。田んぼができて米がとれれば，みんなのくらしはもっと豊かになるにちがいない。」

ゆきえは用水路の工事を実現するために大人の人たちを説得しました。はじめは子どもの言うことだからと相手にしなかった人たちも，ゆきえの熱意に心をうたれ，だんだんその話に耳をかたむけてくれるようになりました。そして，とうとう用水路づくりの計画が実行されることになったのです。

人々は，力を合わせて工事を始めました。まず，山田川をせき止め，用水路に水を流しこむために山下井ぜきがつくられました。そして，そこから中津野まで長い溝がほり進められていきました。

しかし，当時は，ショベルカーや削岩機などの便利で強力な機械はありません。すべて，人の力だけで掘られたのです。しかも，その道筋には小さな山や丘が多く，岩をくりぬいてトンネルを通さなければならない場所が９か所もありました。

あまりにたいへんな作業のため，工事のなかばで，それまで協力してくれた人たちも一人へり二人へりし，とうとうゆきえがただ一人になってしまいました。

ゆきえは，それでもあきらめず，手に血をにじませ，たった一人で工事を続けました。そうした，ゆきえのひたむきな姿に，一時は工事をぬけた人々も再び道具を手に取り，いっしょに用水路をほりはじめました。

１７５２年（宝暦２年），多くの困難を乗り越え，ついにはば約１．８m～３m，全長約４ｋmの中津野用水路は完成しました。この用水路が運ぶ待望の水によって，中津野に３４ヘクタール，山田に３２ヘクタールもの水田がひらかれたのです。

水口ゆきえ祈念碑（山田）

トンネルのかべの道具のあと

中津野用水路地図

上名用水路

古くからあった用水路です。上名には新開・開などの地名がありますが，江戸時代中頃に新しくひらかれた田ということでしょう。昔の人々は，暮らしを豊かにしようと用水路を掘ったり，築き直したりしながら田を広げる努力を行ったのです。

１８６７年５月２３日の豪雨（大雨）で山しお（山くずれ）が発生し，山田地区の家や田畑の多くが泥水に押し流され，たいへんな被害を受けました。上名用水路の隧道（トンネル）も崩れ落ちて手がつけられないひどい状態だったため，用水路を直すために串木野から人夫（土木技術者）を頼んできて修復工事を行いました。その頃の串木野は土木技術の先進地域であり，串木野出身の技術者は，県内各地に招聘され（よばれ）河川の改修工事などで活躍していました。

水路の長さは１ｋｍ，うるおす水田の面積は２３ｈａです。水源になる井ぜきは黒島神社の下にあります。

黒島神社の下にある井ぜき

宇都川用水路・山崎用水路

1　宇都川用水路

学校のそばを流れる川を「宇都川」といいますが，これを上流へとさかのぼっていくと「鳥うて池」があります。１８９０年（明治２３年），樋ヶ宇都や鶴田のあたりに田を持っていた人々がこれを買い取り，池に堤をつき，尺八（取水のための装置）をつくる工事を行いました。この時はいったん失敗しましたが，１８９５年に再びつくり直し，用水路をひらきました。関係者は，瀬戸山良敏以下４９名でした。

水路の長さは４ｋｍ，８．６ｈａの田が恵みを受けています。

2　山崎用水路

山田橋のすぐ上手をせきとめ，寺脇，西田から大山，深水，三十町へとひかれている用水路が山崎用水路です。いつごろできたか，記録も言い伝えもありません。ずいぶん古いものだということです。３０ｈａあまりの田に水を送っています。

宇都川用水路取水口

山崎用水路取水口（帖佐井堰）

外城制度と郷士

江戸時代の鹿児島藩では，武士の数が他の藩にくらべて多かった（人口に占める比率が全国の７％に対して２５％）ので，一部分を鶴丸城（島津氏の居城）周辺の鹿児島城下に置いた他は，大部分の武士を地方各地に住まわせ農業で生計を立てさせました。鹿児島城下に住んだ武士を城下士，地方に住んだ武士を外城衆中（のちに郷士）といいました。

郷士のたくさん集まった所を麓といい，百姓の多い所を在といい，商人の住んだ所を野町といいました。

鹿児島藩には１０２の外城（麓）がありましたが，山田はその一つで，今の地区公民館のあるところに地頭仮屋がありました。地頭とは現在の市長にあたる役職で，その住居と役所を兼ねたものが地頭仮屋です。

写真は地頭仮屋のあった山田地区公民館

地頭には，城下士が任命されましたが，仮屋には住んでいませんでした。地頭の下には麓の武士の中から選ばれた郷三役という３つの役職があり，この郷三役がそれぞれの地方を治めていました。郷三役とは，愛（あつかい）のちに郷士年寄，組頭，横目で，「郷士年寄」は地頭の代理，「組頭」は武芸や教育，「横目」は警察の仕事をしていました。

百姓の住む「在」には麓の郷士の中から任命された庄屋が，その在に行って住み，百姓たちからの税の取り立てや労働の割り振りなどの仕事をしていました。

こうした鹿児島藩に独特の仕組みを外城制度といいます。

ちなみに，山田の地頭仮屋をはじめ諸家の系図や文書類などの記録は，１７０９年（宝永６年）６月１日の大洪水で失われてしまい，ほとんど現在に伝わっていません。このときの洪水は黒島神社から地頭仮屋，人々の家もほとんど押し流してしまうほどのもので，黒島神社の社殿などは中津野まで流れていっていたといいます。

写真は山田麓に残る武家門

写真は山田麓の町並み

門割制度

江戸時代の鹿児島藩が農民を支配した仕組みを門割制度といいます。鹿児島藩では，農民の数家族で「門」もしくは「屋敷」という集団を編成し，納税や夫役（労働で治める税）の負担をさせ，支配の単位としていました。門に比べると人数が少ないものを屋敷といいました。

この門の責任者である長を「名頭」といい，名頭の監督指示のもとに農業に従事する人々を「名子」といいました。

門には田が割り当てられ，とれた米の約８０％を年貢として帖佐御蔵などに納めていました。門の田は郷士たちの耕作する田にくらべると，日当たりや水かかりがよかったけれど，もし門のうちの誰かの田が不作で米がとれなかった場合は，門の連帯責任で補い合って必ず納めなければなりませんでした。

各門は蔵入門と給地門に分かれていました。蔵入門は直接藩の御蔵に米を納めた門で，この米は藩の財源として用いられました。給地門は城下士または郷士に配当された門で，この門の納める米は「旦那」とよばれる武士の家に届けられました。

また，川の治水工事や道つくり，石垣積みなどの労働にも割当がありました。これを夫役といいます。夫役には必ず男性が出るきまりでした。一月のうちのほとんどを夫役に出ることもめずらしくありませんでした。

帖佐松原の鬼火

倭文麻環（しずのおだまき）より

別府川の河口から一里ほど上流の左岸に，帖佐の地頭仮屋（役所）がありました。地頭仮屋の東隣に納屋町御蔵，その対岸に小烏御蔵があって，宮之城・佐志・黒木・藺牟田・山崎・蒲生・山田などの年貢米をここに集めて，船を使って鹿児島城下へ運んでいました。

御蔵で年貢米を受け取り収める仕事は，「枡取（ますとり）」と「日傭（ひよう）」という役人が行っていましたが，お百姓さんが収める米を枡で量るときに，枡取が見て見ぬふりをして，日傭が枡に盛った米を平らにならす棒でザザーと膝の上にかき落とした分を，役得として自分のものにしてしまうという悪い習わしがありました。そのため，例えば三升の米を納めるのに四升の米が必要で，お百姓さんたちは決められた年貢の以上の米を御蔵へ持っていかなければならなりませんでした。

お百姓さんたちの苦しみや腹立ちとは裏腹に，不正を行い甘い汁を吸っている者たちは，どこの蔵でも枡取は蔵役をもてなし，日傭は枡取のご機嫌取りをして言いなりになることが普通となっていたのでした。

ある夜，小烏御蔵の蔵役が，餅田原村に住んでいる枡取の家に出かけることがありました。枡取は，「酒とご馳走を早く準備しろ。」と立ち騒ぎ，蔵役をたいへんもてなしました。

枡取のもてなしを受けた蔵役は，そのまま枡取の家で泊まる

つもりでしたが，夜中にふと目が覚め，明日は上役をもてなすという大事な用事があったことを思い出しました。そこで，あわてて枡取の家を出て自宅へ帰ることにしました。

帖佐松原にさしかかったのは，八つ時（今の時刻で午前二時頃）になっていたでしょうか。蔵役は，松原の左側に立ち並んだ古墓の中で，青い火がひとつ燃えているのに気づきました。

「雨降りなのに何の火だろう。」蔵役は気味悪くなり横目にちらちら見ながら足早にそこを通り過ぎました。

一町（約110m）ほど行ったところで，蔵役は後を振り返ってみました。すると，その火は八方に散って燃えながら，こちらの方へ向かってくるではありませんか。びっくりして必死に逃げましたが，火はあっという間に追いついてきました。周りを取り囲まれてしまいまった蔵役は「助けてくれ，助けてくれ。」と大声を上げながら，雨傘で追い払おうとしますが，傘に燃え移りそうで生きた心地もありません。

松原から四，五町ほど行くと小烏の里に入ろうとする辺りに，御蔵の日傭が住んでいる村でありました。声を聞きつけた日傭が，家から飛び出し声のする方へ行ってみると，その声の主は小烏御蔵の蔵役ではありませんか。「どうしてこんなに大声で叫ばれるのですか。」と日傭いが尋ねましたが，蔵役は頭に火がついているような感じがして，ものも言えなかったということです。

蛇塚（伝説）

江戸時代，人々は用水路をつくったり山野を切り開いて水田を広げたり，米の収穫を増やし生活をより豊かにしようとたいへんな努力をしました。その様子は，いくつかの伝説となって残されています。

昔，山田のある郷士が，小戸ヶ谷（上名にある小字）で，川に堰をつくり水を引いて田をひらき，丘に石を積んで畑にしていました。ある晩のことです。夜もおそくなり，うとうとしたと思う間もなく一匹の大蛇が郷士の夢枕に立ちました。そして，

「あなたが，新しく拓こうとしている畑に竹やぶが残っています。どうかあと３日，あの竹やぶをそのままにしておいてください。どうかお願いします。」

と哀れな様子で郷士に頼みました。

その翌日，郷士は夢のことが気がかりでしたが，仕事の都合があったために竹やぶに火を入れ焼き払ってしまいました。

その火の勢いが天にも達しようとしたとき，大きな音が鳴り響きました。郷士が竹やぶの焼け跡に見つけたのは，黒こげになった大蛇でした。その大蛇のお腹は大きくふくらんでおり，出産直前のようでした。かわいそうに大蛇は，もうすぐ生まれたであろう赤ちゃんといっしょに焼け死んでしまったのです。

郷士は自らの行いを非常に後悔し，大蛇の親子の魂が安らかであるようにと，生涯祈り続けたということです。

大戸翁（伝説）

江戸時代の中頃のことです。大戸翁は，上名黒瀬地方で水田を新たに拓くなどの開発を行なった人物であり，油千瓶，朱千瓶を持つ長者になりました。油千瓶，朱千とは，油や米を瓶に千も蓄えているということです。

これに目をつけた盗賊たちが，その財宝を盗もうと，大戸翁の屋敷がよく見下ろせる小高い山の中に潜んで，家の人たちが寝入るのを待つことにしました。

夜もおそくなり，村の人たちは家々の明かりを消して寝静まりました。盗賊たちは，いよいよ大戸翁の屋敷に盗みに入ろうと，様子をうかがったところが，庭には松明を燃やし，ワラを打つ音がして，皆まだ起きて働いているようです。そのうちには，屋敷の人たちも寝てしまうだろうと，盗賊たちは辛抱強く待っていましたが，屋敷の様子は相変わらずです。

ついに一番鶏が鳴き，夜が明けて，盗賊たちは目的を果たすことができず退散しました。

黒瀬集落の北東に，盗賊たちが毎夜集まっていたという場所が「遠目塚」という地名で残っています。

住吉池と浜石門（伝説）

昔から，「住吉池には『池の主』がいて，若い娘を人身御供（人をいけにえとすること）として池に沈めないと，洪水が起こりあたりの村々に被害が出る。」といわれていました。そこで，人々は泣く泣く，毎年娘を一人池に沈めていたそうです。

さて，今年はどこの娘が人身御供となるのだろうかと，人々が噂をしあっていたところ，大山の浜石門のある家の屋根に真っ白い羽根の矢が突き立ちました。これは娘を差し出せという池の主の意志を伝えるものでした。

さて，浜石門では，大切なかわいい娘を失ってしまう悲しさに，皆で泣きくれていましたが，そこへ，どこからともなく一人のお坊さんが立ち現れました。そして，人々にこう言いました。

「きっちりと栓をしたひょうたんを集め，まわりに布団を巻き，娘の着物を着せて人形を作りなさい。それから，その人形を池に浮かべるのです。」

娘の家族をはじめ，皆でひれ伏してお坊さんにお礼を申し上げましたが，顔を上げたときには，不思議なことにお坊さんの姿はどこにもありませんでした。

浜石門では，お坊さんに言われたとおりに人形を作り，住吉池に浮かべました。すると，今まで晴れていた空が真っ黒な雲でおおわれると，たちまち大粒の雨が激しく降りだし，強い風

が吹き始めました。だれかの叫び声に人々が池を見ると，池の真ん中が渦巻き，そこに見るも恐ろしい大蛇が姿を現しているではありませんか。

大蛇は，人形めがけてまっしぐらに泳いでいき，大きな口を開けておそいかかりました。しかし，人形にはたくさんのひょうたんが入っているために，水の中に引きずり込むことができません。つるりつるりと逃げる人形を追いかけ回しているうちに，池の主は体力も気力も使い果ててしまい，口から血を吐いてとうとう死んでしまいました。

浜石門はもちろん，長い間，住吉池の主に苦しめられていた周辺の人々は大喜びをしました。そして，「それにしても，あのお坊さんは，だれだったのだろうか。きっと修行を重ねた偉い方だったに違いない。」と池の畔に「聖の宮」を建て，不思議なお坊さんと大蛇の鱗を一緒に祀ったそうです。

西田の田の神

「奉寄進　文化２年乙丑　四月吉祥日　姶羅郡　山田西田上下郷中」と刻銘があります。文化２年は１８０５年（江戸時代後期）で今から約２００年前です。袴をはき，タスキがけをして，頭にはシキ（甑簀：餅米などを蒸すときに間に引く藁製の編み物）をかぶり，右手にはメシゲ（しゃもじ）を持ち，左手は小手をかざしています。また，朱色に塗られたお顔，垂れた目尻と眉，大きな鼻，おちょぼ口は，ユーモラスで見る人の心を和ませる親しみやすさがあります。

隣に並んでいるのは火の神様です。この像の左にある祠にはえびす様（商売の神さま）が祭られていましたが，盗難にあい，かわりに交通安全の神様が祭られています。

稲刈りが終わる１１月初め頃，西田自治会の方々が，お膳にのせた料理（煮しめ，刺身，酢の物，ご飯）とカラカラ（酒器）に入れた焼酎を供え，その後，集会所で飲食をします。

写真は西田の田の神（右）

石敢當（せっかんとう）

石敢當は中国から伝来した風習で，福建省で始まったと言われています。日本では，主に沖縄や鹿児島県で見られます。「せきかんとう」「いしがんとう」などとも読みます。

石敢當の名前の由来は，中国の武将の名前や力士の名前とされますが，他にも違う説があります。

丁字路や三叉路などの突き当たりに石敢當を設け，魔物が集落に入ってくるのを防ぐ魔除けとしました。魔物は直進する性質があり，石敢當に当たると砕け散るとされたためです。

また，悪魔を寄せ付けないための風習として，十五夜の綱を作るときに大きなぞうりを作って，木の枝にぶら下げることもしていました。これは「この集落にはこんな大きなぞうりをはく力の強い者がいるんだぞ。」という魔物への警告の意味です。

写真は新馬場久永医院近くにある石敢當

一向宗の禁制と隠れ念仏

鹿児島藩では，一向宗（浄土真宗）を信仰することを厳しく禁止していました。それは，戦国時代に，門徒（一向宗を信じる人々）が，主君（殿様）の命令よりも一向宗の方を重く考え，しばしば一揆（団結して権力者に対抗すること）を起こしてきたためだと考えられています。

慶長２年（１５９７年）２月２２日，島津義弘が，出した掟書二十二条の最後に，一向宗の禁止令を出しました。法律的に一向宗を禁じたのはこれが始まりです。４年後の慶長６年（１６０１年）には正式なものが出され，鹿児島藩では，約３００年間にわたり一向宗を厳しく取り締まりました。一向宗を禁止したのは，全国で鹿児島藩と人吉藩（熊本県南部）だけです。

しかし，一向宗の信者は，信仰を捨てず，「講」（同じ目的をもった組織）をつくって，密かに隠れて阿弥陀仏を拝みました。これを隠れ念仏といいます。鹿児島藩の各地にいくつもの講があり，山田にも「三会講」「煙草講」「焼香講」という３つの講がありましたが，その中でも「三会講」は大きな団体で，上，中，下の三組からなっていました。

上組　―　吉松，京町，加久藤

中組　―　霧島，東襲山，溝辺，牧園，嘉例川

下組　―　横川，山田，木津志

山田は，これが更に分かれて，５～６戸から１０戸くらいの

小団体となり，それぞれ丸尾寺，田原寺，中村寺，蔵敷寺，中津野寺，隈原寺，辺川下寺，菖蒲谷寺，内山田の池田寺などと称していました。（寺といっても建物などはありません。）

これらの団体には番役がいて，日常の説教や葬儀を執り行っていました。仏像は，全ての人が手に入れられるものではなく，また発見される恐れがあるため，団体に１体か２体を所有していて，これを拝む日も，１日，１５日，２５日と決めていました。その日には，２５才以上の青年たちは要所要所に立ち番をし，役人に発見されるのを防いだそうです。一向宗の信者が，隠れて拝んだ場所は次のようなところです。

【大寺】

大山の奥，天文１５年（１５４６年）に奉納された仏像があるので，古い時代の寺の跡と思われます。いつしか寺はなくなって，ここで一向宗の隠れ念仏が行われました。

【奈良袂の鍛冶屋跡】

山中に，仏像をかける段のついた穴がまがあるそうです。

【西別府の隠れ迫】

板ノ口から瀬戸段付近の信者が，隠れ念仏を行った場所。

一向宗の信者であることが役人に見つかると，仏像を焼き捨てられた上にひどい刑罰を受け，一向宗をやめることを誓わされました。死刑も行われたそうです。

一向宗を信じることが許されたのは，西南戦争（１８７７年）の後のことです。

廃仏毀釈

「廃仏毀釈」というのは，仏教を廃し（壊すこと，なくすこと）神道を国の宗教にしようとする政治的運動です。

廃仏毀釈によって，鹿児島県内にあった１６１６の寺院は全て廃止され，仏像や書物は破壊または焼却されました。また，２９６６人のお坊さんがやめさせられました。

鹿児島県では，全国的に見てもっとも激しく廃仏毀釈が実行されました。この時に寺院にあった貴重な文化財や記録文書などがほとんど消滅してしまったことは，非常に残念なことです。

山田にあった全ての寺院も壊されました。

玉城山禅福寺陽春院

上名の城にありました。鹿児島市にあった曹洞宗福昌寺（島津氏の菩提寺）の末寺で，今から５００年くらい前（室町時代）にできたと考えられます。

廃仏毀釈によって破壊され，現在はお坊さんのお墓と一部が壊れた仁王像が残っています。この仁王像は，１７６０年（宝暦１０年）１１月に上名の水流門より奉納されたものです。

１９６４年（昭和３９年）６月，この寺のあった場所の付近から不動明王の頭部が発見されました。現在は，山田小学校の校長室に保管されています。

写真は陽春院跡の仁王像

宝珠山勝高寺正田院

下名の鶴田にあった寺院です。鹿児島市にあった真言宗大乗院の末寺で，本尊は薬師如来。１６世紀中頃（室町時代）に創られたと考えられます。標高７０mほどの高台にあり，帖佐の松原や錦江湾を行き来する帆船を眺めることができました。特にここから見る桜島の景色はとても有名だったそうです。

写真は三国名勝図会正田院

城光寺の泉水（伝説）

昔，中川原に城光寺というお寺がありました。大きな仁王像が立つ山門があり，５つの伽藍が建つ大きなお寺であったそうです。このお寺の和尚さんは，学識の高い偉い方で，殿様からもたいへん信用されていました。

ある年，和尚さんは，殿様のお供をして遠い都に上りましたが，帰りに十才くらいの美しい小僧さんを連れて帰ってきました。小僧さんはたいへん利口だったので，きっと偉いお坊さんになるだろうと，村人たちは噂し合いました。

数年の年月が経ち，小僧さんはりっぱな僧に成長しました。その頃，この地方に激しい戦が起こりました。戦は，幾度も繰り返され，多くの武士たちが死んだりけがをしたりしました。城光寺の若い僧は，和尚さんにお願いして，戦で傷ついた武士たちを，敵味方の別なくお寺に受け入れ，手厚く看護をしました。

僧たちは，お寺にわき出ている泉水で，けが人の傷口をきれいに拭きました。そして，毎日その泉水で湯浴みをさせました。すると，不思議なことに傷口はふさがり，痛みもなくなるのでした。

やがて，長い戦も終わり，傷の治った武士たちは，敵も味方もなく僧たちに厚くお礼を言って，帰っていきました。

しかし，敵味方を区別せず治療した城光寺の若い僧の行い

を，敵の回し者（スパイ）ではないかと疑う噂が立ちました。やがて，その噂を殿様の耳に入れる者がいて，殿様は城の武士たちに僧を捕まえてくるように命令しました。

村人たちは心配して，若い僧に早くどこかに逃げるように勧めました。しかし，僧は，美しい顔にただ静かな笑みを浮かべるだけでした。

その夜半のことでした。村人たちは，天地がひっくり返らんばかりの大きな雷鳴のような音に飛び起きました。そして，城光寺の全ての建物が，火を噴いて燃え落ちるのを見ました。

その後，若い僧の姿を見た者は誰もいなかったといいます。

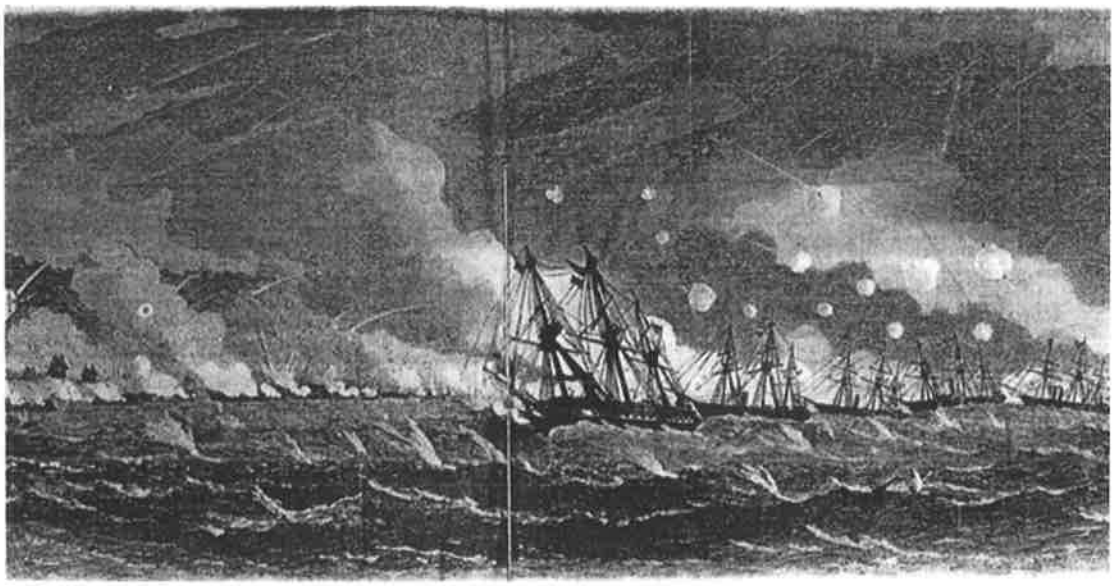
僧が治療に使った泉の水は，その後も長く村人たちが湯治に使ったということですが，今はその跡形もありません。

城光寺があったと言われる場所，左下の茂みの中に板碑（室町時代作）がある。

山田と薩英戦争

１８６２年（文久２年）８月２１日，江戸（現在の東京）から鹿児島へ帰る途中だった島津久光（鹿児島藩主の父）の行列に，イギリス人４名が馬を乗り入れてきました。そのため，数名の藩士が刀を抜いて斬りかかり，イギリス人４名のうち１名が死亡，２名が重傷を負いました。これを「生麦事件」といいます。（事件のあった生麦村は，現在の神奈川県横浜市）

イギリスは，生麦事件の犯人の処罰と賠償金を要求しましたが，鹿児島藩はこれに応じませんでした。そのためイギリスは，武力で脅し交渉を優利に行うために，１８６３年６月２７日，軍艦７隻を鹿児島湾に侵入させました。しかし，鹿児島藩とイギリスの交渉はうまくいかず，７月２日にイギリスが鹿児島藩の船を拿捕（他国の船を捕まえること）したことをきっかけに戦闘が起こりました。これを薩英戦争といいます。



イギリス艦隊は，台場（大砲陣地）だけでなく，城下町の民家にたいしても，砲撃やロケット弾攻撃を加え，おりからの強風のため大規模な火災が発生しました。陸上砲台や近代工場を備えた集成館も破壊されました。

鹿児島の大砲は，イギリス艦隊に比べると射程距離が短く，性能も劣っていましたが，悪天候のため思うように船を動かせず大砲のねらいも定まらないイギリス艦隊は，予想外の苦戦をすることになりました。

鹿児島藩の大砲によるイギリス艦隊の損害は，大破1隻・中破2隻の他，死傷者は63人（旗艦ユーライアラスの艦長・副長の戦死を含む死者13人，負傷者50人）でした。一方鹿児島藩側は人的損害は死者5～8人，負傷者18人程でしたが，城下町の広い範囲や藩汽船3隻，民間船5隻を焼失するなど物的損害は甚大でした。

この戦争に，山田からは，郷士年寄瀬戸山藤太以下５１名が出陣していますが，山下堅之丞という２１才の若者が，頭部に弾の破片があたり戦死しています。

薩英戦争記念碑（鹿児島市祇園之洲）

鹿児島藩の使用した大砲

地租改正

江戸時代の税は，土地の生産力を石高（米の生産高）で表し，その石高に応じて「**年貢**」を納めさせるものでした。また，年貢は，直接に生産者から米で取り立てられました。

１８７３年（明治６年），明治政府は，それまでの税の制度を改め，土地の価値に見合った金銭（地代の３％）を，土地の持ち主に納めさせる全国統一の課税制度を導入しました。これを，**地租改正**といいます。

しかし，鹿児島県では，相変わらず，取れ高１石（籾）について３斗９升８合（玄米）を税として納めるという古い制度のままでした。

１合×１０＝１升，１升×１０＝１斗，１斗×１０＝１石

ちなみに，籾１石は玄米にすると半分に減ります。そのため，鹿児島藩では八公二民（年貢８０％生産者２０％）であったといわれています。

そのため，まず都城の農民たちが，早く金納（金銭で納める）にすべきであると騒ぎだし，続いて帖佐の松原でも騒ぎが起こりました。山田でも，同じ騒ぎが始まったので，区長として加治木にいた別府晋介や副区長の越山休蔵が山田に乗り込み，山田戸長の瀬戸山良知，竹下六郎と一緒に，代表の農民たちを説得しています。

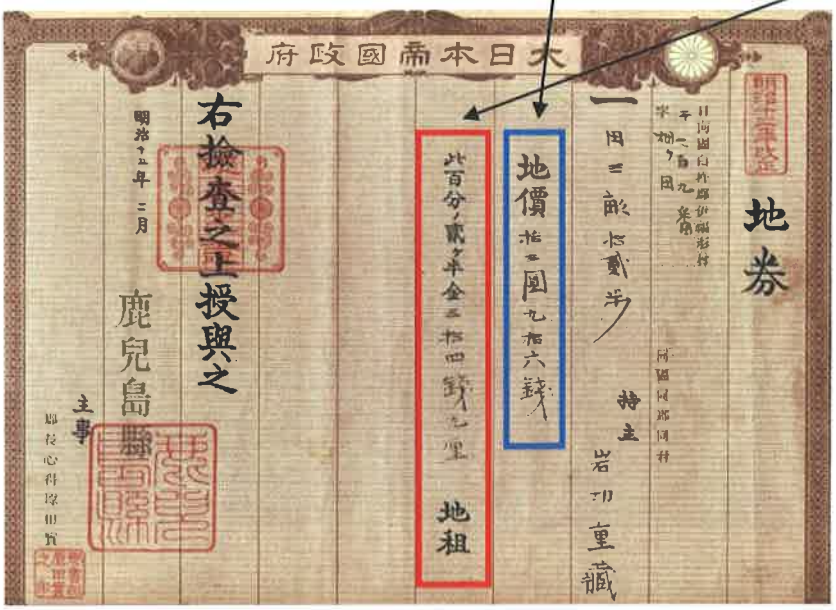
鹿児島においては，士族（元武士）たちは地租改正に反対で

した。江戸時代，武士は殿様に与えられた知行地で農民が作る米から収入を得ていました。しかし，明治になり，その知行地が，農民に分け与えられたために収入が減ってしまいました。その上に，自分で作った米には農民と同じだけの税を納めることになりました。それまでは，取れ高１石につき八升余りだったので，一気に税が重くなり生活が苦しくなったのです。

また，廃刀令（１８７６年）により刀の携帯が禁止されたことや徴兵制などの新しい制度がしかれたことなど，政府に対する不満をつのらせた士族たちは１８７７年（明治１０年）に西南戦争を起こしました。

そのために鹿児島県では，地租改正への着手が遅れ，これが完全に実施されたのは，西南戦争後の１８８１年（明治１４年）でした。

下の写真は，１８８２年（明治１５年）に鹿児島県から土地の所有者に与えられた「地券」で，地価（土地の値段）と地租について記されています。



やまだしょうがっこう
山田小学校

１８６９年(明治２年)，山田地頭の仁礼平輔は，山田に学問所を設置を設置することを決め，山田の地頭仮屋（地頭の住居であり政治を行ったところ）を仮校舎として授業を始めました。

鹿児島県では，廃仏毀釈で職を失ったお坊さんを先生として起用する例が多かったようですが，山田では加治木の長年寺のお坊さんだった隈元直次郎が，「授読助・漢字掛」として，士族（武士）の子どもたちに学問を教えました。

１８７２年(明治５年)，学制が発布され，学問所を学校とし，外城８９郷校と名前を変えました。明治８年に学制が改正され，士族だけでなく一般の子どもたちも入学できるようになりました。そして，１８７６年(明治９年)に正則小学校「山田小学」が誕生。これを山田小学校の創立としています。

写真は山田地頭仮屋跡（現在は山田地区公民館）

同じ年，山田小学の分校として大山に日枝小学，上名に稲荷小学が，創立されました。

１８８６年（明治１９年），小学校令が改正され，山田尋常小学校となりました。尋常科は義務教育でした（４年間）。

１８９８年（明治３１年），現在の旧農協山田支所に移転改築されました。翌年には，山田村女子補習科を設置。

１９０９年（明治４２年），義務年限を６ヵ年とし，上名の稲荷尋常小学校と大山の日枝尋常小学校を併合し（いっしょに合わせること），４教室の校舎１棟を増築しました。

写真は旧農協山田支所

山田小学校が，現在の場所に移転したのは，１９３０年（昭和５年）です。

１９４６年（昭和１６年）４月，山田国民学校と名前を変え，軍国主義教育が行われました。

１９４７年（昭和２２年），現在の山田小学校となりました。

西南戦争

１８７７年（明治１０年），明治新政府の政治に対して不満をもつ鹿児島の士族（武士）は，西郷隆盛を指導者として反乱を起こしました。これを西南戦争（西南の役）といいます。

薩軍（鹿児島士族の軍勢）１３０００人が鹿児島を出発したのは２月１５日，５０年来といわれる大雪の積もる中，熊本を目指して進みました。

薩軍は７つの大隊で編成されていましたが，姶良方面から参加した士族は，独立１番大隊（後に６番大隊）と独立２番大隊（後に７番大隊）に編入されました。連合大隊長は別府晋介という人物でした。

山田からは，７番大隊３番小隊９７人（隊長瀬戸山良知）と７番大隊８番小隊１００人（隊長竹下六郎）の２つの小隊が編成され，２月１５日山田を出発しています。

当時の錦絵に描かれた西郷軍出陣の図

薩軍は，熊本城に籠もる政府軍を攻撃しましたが，熊本城を攻め落とすことができませんでした。その後，北上をしたものの増え続ける政府軍のために押し戻され，田原坂（熊本県）の激戦で敗れたのを境に力を失ってしまいました。その後，九州の各地に分散し戦いを続けますが，鹿児島市の城山で最後の戦いが行われ西南戦争は終わります。

山田から参加した瀬戸山良知隊は，西南戦争最大の激戦が行われた「田原坂の戦い」に参加しています。3月8日午後1時，官軍（政府軍）が田原坂の薩軍陣地に大勢押し寄せてきました。瀬戸山隊は奮戦し官軍を防ぎましたが，両軍の鉄砲の先がふれ合うばかりに接近し，非常に激しい戦いだったそうです。その後は度重なる戦いで弾薬がなくなり，刀を振るって切り込む白兵戦が行われるようになりました。そして，多くの人々が傷つき，あるいは戦死しました。

竹下六郎隊は，はじめ熊本城付近の守備につきましたが，その後は，三田井（宮崎県），馬見原（熊本県），須木（宮崎県）など各地を転々と戦い続けました。そして，8月7日，宮崎県日向市で政府軍に降伏しています。

この2隊以外にも，後から参加した人が33名おり，山田から従軍したのは合計230名，そのうち57名が戦死しました。

西郷隆盛の腰掛け石

１８７７年（明治１０年）の西南戦争の時，宮崎県延岡市で政府軍に追い詰められた西郷隆盛は，その囲みを必死に突破し鹿児島城下を目指しました。西郷隆盛たちは，途中何度も政府軍と戦闘を行いながら移動を続け，８月３０日，山田に到着しました。

６か月間も激しく戦い，政府軍の目を避け険しい山の中を歩いてきたために，西郷隆盛に同行した人たちの衣服は破れ，草鞋（藁で作った履き物）もなく素足の人もいたということです。

西郷隆盛は，新馬場の瀬戸山十郎宅で休息をとりましたが，家にあった帖佐人形をたくさん並べ，それを見て楽しんだそうです。その時，西郷が腰掛けたという石が「西郷隆盛の腰掛け石」として庭に残っています。

西南戦争招魂碑

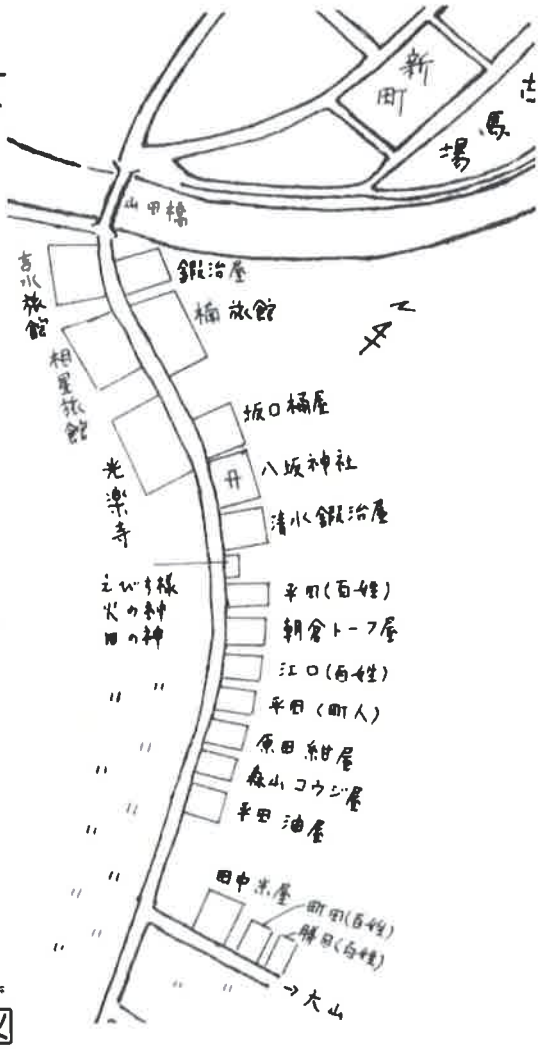
凱旋門をくぐり，２つの石段を登り切った頂に，招魂社と５基の石碑が建てられています。このうち右側の２基が西南戦争関係の碑で，前の碑には正面に「戦亡招魂表」の文字，側面に明治１２年３月（空白）日と建立年月，背面には瀬戸山良知以下６１名の戦死者名が刻まれています。

後の碑は，大正元年（１９１２年）１０月に建立されたもので，正面には「西南役紀念碑」とあり，背面には碑を建てた由来と建碑を行った竹下六郎ほか１６８名（西南戦争従軍者）の氏名が刻まれています。

にしだのまち
西田野町

江戸時代，鹿児島藩では麓に隣接して商業を行っていた地域を野町といいました。西田野町に「八坂神社」（商売の神様）が建立されたのは１７７４年（安永３年）ですから，この頃には西田野町は既に存在していたのでしょう。文政年間（１８１８年～１８３０年）の頃には６人が「こうじ屋」「油屋」「紺屋（染物屋）」などを営んでいました。

明治から大正にかけて，山田橋の北側に村外から商人たちが移住してきて新町商店街ができました。そのため，西田野町はすっかり衰えました。昔と今の地図を比べてみるとおもしろいですよ。



写真は西田野町があったあたり

にっしんせんそう
日清戦争

イギリス，フランスなどの欧米の国々は，インドなどアジアの国々を侵略して植民地にしていました。さらに，清（中国）に戦争をしかけるなどして，領土や権利をうばいました。また，シベリアを征服したロシアも東アジアに迫っていました。

こうした危機に目覚め，明治維新によって新政府を成立させ，いち早く近代的な国家づくりを始めることができたのが日本であり，遅れたのが朝鮮でした。

日本は，欧米の侵略に備えるために，朝鮮に対して開国と近代化を行うよう交渉を重ねました。しかし，朝鮮は国内での権力争いを続けるばかりで改革を実行できませんでした。さらに，清は，朝鮮の宗主国（主人の国）であるとして，朝鮮が国の体制を変えることに反対し，改革を妨害しました。

１８９４年（明治２７年），朝鮮南部に反乱が起こりました。この反乱を自力で解決できなかった朝鮮政府は，清に助けを求めました。日本は，これを機に朝鮮から清の勢力を追い出し，朝鮮を独立させようと，清との戦争に踏み切りました。

日清戦争は，日本優利のままに進み，１８９５年（明治２８年）下関で日清講和条約が結ばれました。日本はこの条約で，清に朝鮮を独立国と認めさせ，台湾などを日本の領土としました。また，多額の賠償金を支払わせました。

山田地区からは，日清戦争に１３人が参加しています。

日露戦争

日本は，日清戦争に勝利しましたが，満州（中国東北部）と朝鮮の支配をめぐってロシアと対立を深めるようになり，関係が急激に悪化します。こうして１９０４年（明治３７年）起こったのが日露戦争です。

日本は，陸軍が旅順や奉天の戦い，海軍が日本海海戦で勝利するなど優位に立ち，１９０５年，ポーツマスで講和条約の調印が行われました。

日露戦争には，山田地区から合計１１３人（陸軍８８人，海軍２５人）が参加し，１４人が戦死しています。

日本は，日露戦争後，朝鮮を併合し，満州事変から日中戦争，太平洋戦争へと突き進んでいくことになります。

招魂社にある慰霊碑のうち左側後方の２基が日清・日露戦争関係のものです。左前の慰霊碑が１９０８年（明治４１年）に建てられたもので，「忠魂碑」の文字を大山巌元帥が書いています。

がいせんもん
凱旋門

山田地区公民館の隣に大きな石造りの門があります。これは，日露戦争の勝利と従軍した山田地区の人たちの帰還を祝って，１９０６年（明治３９年）に建てられたものです。

奥行き１．２１ｍ，幅０．９ｍ，高さ４．７１ｍの石造りのアーチ型をしており，鹿児島の優れた石橋技術が使われています。石材は凝灰岩で，言い伝えによると上名の池平から切り出されたものだそうです。

当時，凱旋門は日本の各地でたくさん建てられましたが，現在までほぼ完全な形で残されてあるのは，山田の凱旋門と静岡県浜松市にある煉瓦造りのものだけです。ちなみに，日本の凱旋門の起源は，運動会のときなどに建てられる緑門だといわれます。山田小学校の稲穂門ともつながりがあるんですね。

山田の凱旋門は，２００１年（平成１３年）８月２８日に国の登録有形文化財に指定されました。

秋季大運動会稲穂門

こうぶんかん
興文館

１８７７年（明治１０年）の西南戦争の後，当時の山田村麓（麓は郷士が多く住む集落）の青年達は，学習を深めお互いを励まし合い元気づけるために，山田小学校の一室を使用したり，村の倶楽部（集会所）を借りて，毎夜勉強をしたり武道をしたりして心と体を鍛えていました。これを夜学校，または研究舎といっていました。（のちに瀬戸山良敏によって興文館と改名されました。）しかし，学校の都合によってたびたび夜学を中止することがあったり設備が不十分であったりしたために，青年達から新たな学舎（学習をするための建物）を建設したいとする要望が起こりました。

１９１５年（大正４年），山田地区公民館の隣に興文館が建設されました。かたわらには記念碑が建てられています。

興文館では主に古馬場，新馬場，星ヶ山の男の子たちが学び，義士伝，曽我の傘焼，十五夜の綱引，鬼火焚きなどの行事も行

なわれました。その後，１９４５年（昭和２０年）の終戦まで，興文館において夜学が行われ，青少年の学習の場，話し合いの場，心と体を鍛える場として活用されました。

さらに，戦後の興文館は剣道を中心として，青少年を健全に育てるために大きな役割を果たしました。

弘道舎

寺脇に弘道舎と名づけられた学舎がありました。１９１３年（大正２年）に山田村青年会が文部省の表彰を受けたことで，下名北部（新馬場・古馬場・星ケ山）で興文館を建設する計画が進んでいました。下名南部（寺脇，西田など）の青年達は，興文館建設に協力し参加することを申し入れました。しかし，話し合いはうまくいかず，下名南部だけで別に学舎を建設することになりました。弘道舎は，１９１５年（大正４年）に建設されました。

昔の医療

今のように医療が発達していなかった昔は，ほとんどが自分の家に伝わる方法でけがや病気の手当をしていました。

例えば，草木の根や葉，または皮などから揉み出した生の汁や煎じた（煮詰めて出すこと）ものを飲んだり傷口につけたりしました。

○熱が出たとき　…大根を煎じて飲む。

○蚊，虻に刺されたとき　…生キノコを女の人が噛んでつける。

○できもの　…生大根をつける。

○とげ抜き　…イボタノキの皮を黒焼きにしてつける。

○腹痛　…平たい石を火で温め（温石），病人の腹に当てる。

その他，灸（もぐさを小さくちぎり患部などにのせて火をつけ温める）や紅（血行促進？）などが用いられました。

これらの方法は実際に効果があるものかはよく分かりません。決してまねをせず，病院に行って治療してください。

明治初期になると，富山から売薬人（鹿児島では「越中どん」と呼ばれ親しまれた。）が来るようになり，その薬も使われるようになりました。越中どんは，月に一度薬がたくさん入った大きな四角い葛籠（箱形のかご）を背負って来て，家庭に預けてあった薬箱の中身を古いものを新しいものに取り替えます。そして，使った分の薬の代金を受け取りました。按摩膏薬（肩や腰など痛むところにはり付ける）がよく用いられたそうです。

山田の病院

○**川俣医院**（内科）…鹿児島で開業していた川俣如水が郷里に帰ってきて，１８８７年（明治２０年）ごろに下名の新馬場で開業しました。如水は漢方薬も販売していました。１９３３年（昭和８年）に死亡したために閉院。漢方薬の販売だけは家伝薬として子の清孝に引き継がれましたが，１９５０年（昭和２５年）には廃業（やめること）しました。

○**鶴源医院**（内科・眼科）…川俣医院の薬局に勤め，のち長崎で医学を学んだ源（名は不明）が，明治２０年代に新馬場で開業（後に寺脇に移転）。昭和の初め頃に閉院しました。

○**田代医院**（内科・外科）…田代弥太郎が１８９７年（明治３０年）ごろ，古馬場に開いた医院。引き継ぐ人はなく閉院。

○**田中医院**（外科）…同じころ，田中弥吉が古馬場に開きました。昭和の初めごろ閉院。弥吉は，上記の弥太郎と一緒に川俣如水に学び，のち鹿児島市で医学を勉強しました。

○**有馬信明**（漢方）…１８８７年（明治２０年）ごろ，伊集院から来て，上名内山田で漢方薬の販売をしていました。救命水，脳神湯は特に有名で，遠く県外から来るお客さんもいました。

○**久永医院**（内科）…久永貞邦が長崎医学専門学校（現在の長崎医科大学）を卒業し木津志で開業し，１９２８年（昭和３年）に新馬場に移転しました。現在の院長は孫の富士朗先生です。現在，山田校区唯一の病院であり，区民の健康を守っています。

山田の昔の町

明治になってから，一番初めに，昔の本通りである古馬場に，森永という人が魚屋をやっていました。つぎに，平田という人が魚屋を開きましたが，この店は魚を売る他に，山田で生産される竹の皮，あおぎり（樹皮の繊維を利用），葛籠などの物品をお金または物々交換（品物と品物を直接取り替えること）で商売していました。

明治２７年（１８９４年），日清戦争の頃，新町に原口商店（加治木から移住）ができ，明治３８年（１９０５年）出口商店が中川原から移転してきました。新町は，山田の中心地であり，交通の便がよく，この辺りに人がよく集まりました。そのため，明治の末頃から，鹿児島や加治木，蒲生からだんだんと店が移ってきて，大正の初めにかけて商店街が構成されました。

明治の末頃，県道が開設されると，当時の県道である新馬場に店が集まってきました。剣道の竹刀屋，箸屋，鍛冶屋などの店がありました。

昭和の初めから中頃までは，山田村の役場などがあり，北山や木津志からも人が来ていてたいへん賑やかでした。タクシー，トラック運送屋，旅館（３軒），飲食店（５軒）がありました。

大山には何でも屋の平田店がありました。

山田村が昭和３０年（１９５５年）に姶良町に合併し，交通が発達したことから以前のような活気はなくなりました。

山田の商工会と祇園祭

商工会とは，各商店の経営をよくしようという目的で作られ，相談を受けたり指導をしたりする団体のことです。

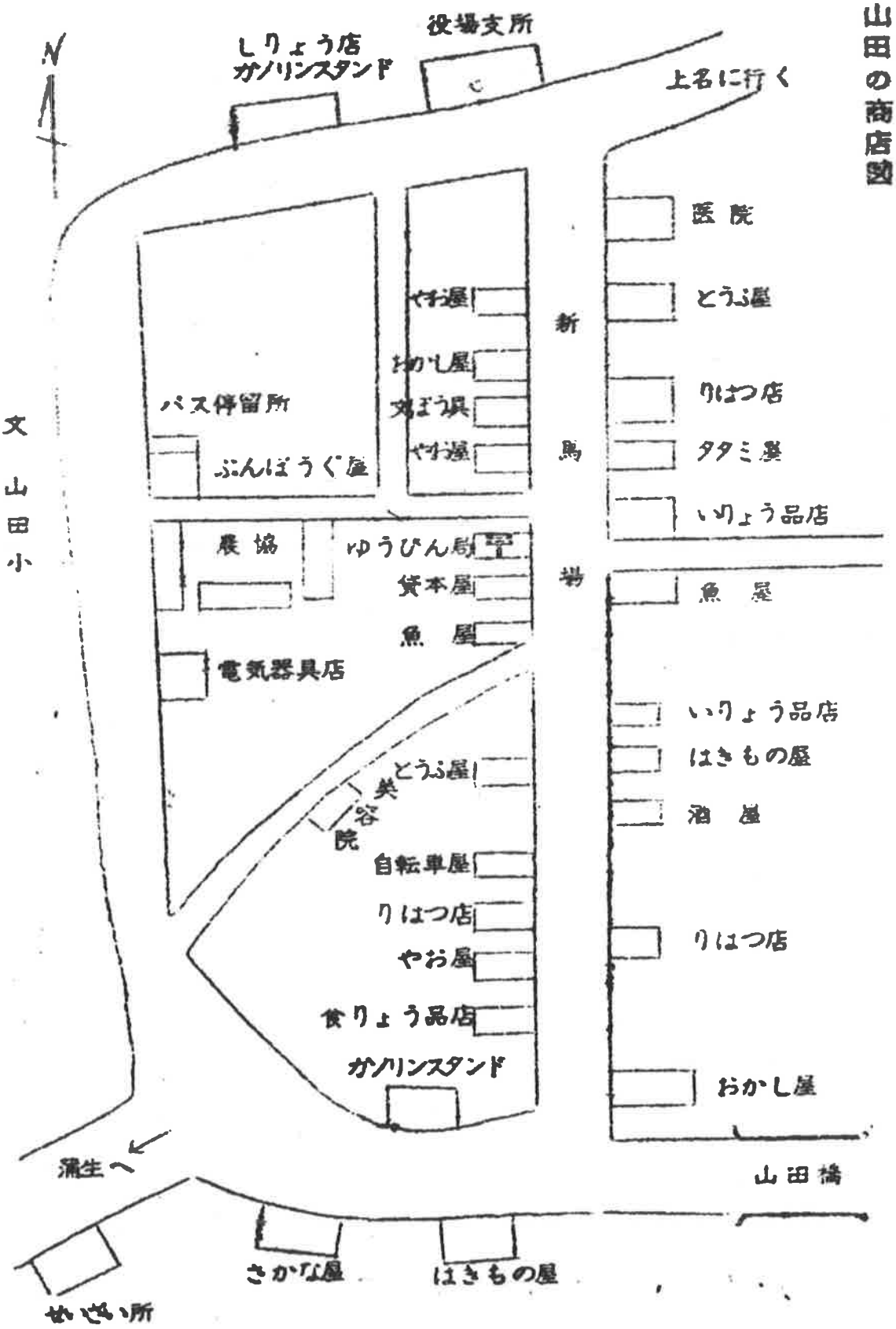
１９６４年（昭和３９年）頃，山田では３０戸ほどの商店が商工会に入っていました。大半が食料品店で，新町，新馬場に集中していました。

山田の商工会では，暮（１２月）の大売り出し，盆（８月）の祇園祭を行っていました。また，各商店の親睦を図る目的で秋にスポーツ（野球など）を行っていました。こうした行事は以前はたいへん盛んでした。

お祇園様（八坂神社）は，商売繁盛の神様です。山田では，お盆におぎおんさあとして賑やかなお祭りをして，お神輿を出していました。（昭和３１年，新町の水口ゆきえ記念碑の前に八坂神社をまつったとあります。）この祭りは，姶良町に合併した後は３カ町村（帖佐・重富・山田）で行うようになりました。

写真は新馬場通り

山田の商店街（1964年）

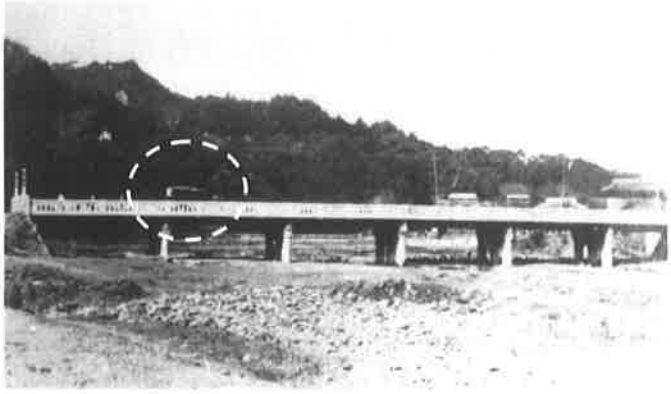


客馬車

１９０７年（明治４０年），水明旅館の吉水市蔵という人が山田で最初の客馬車を始めました。

この３年前，山田から重富駅に通じる県道が開かれていたので，客馬車も１日２回，重富駅まで行っていました。１９２６年（大正１５年）に帖佐駅ができると，客馬車も帖佐駅まで行きました。発車１０分前になると，山田橋の上で合図の笛を吹いて乗客に知らせていたそうです。

明治時代の末頃から大正時代にかけて，山田は山田村の中心地として，役場やその他の官公署がありました。そのため，あちこちから役人や村人などが山田に出てきて用事を済ませるので，町も栄えていました。旅館も水明，相星，知覧，楠と４軒もあって，駅へ送る客も多くいました。吉水の他にも客馬車の営業をする人たちも出てきましたが，昭和の初め頃になり乗り合いバスが登場すると，客馬車に乗る人はいなくなってしまいした。



（左）山田橋上を客馬車が通りすぎるところ　（右）客馬車

やまだばし
山田橋

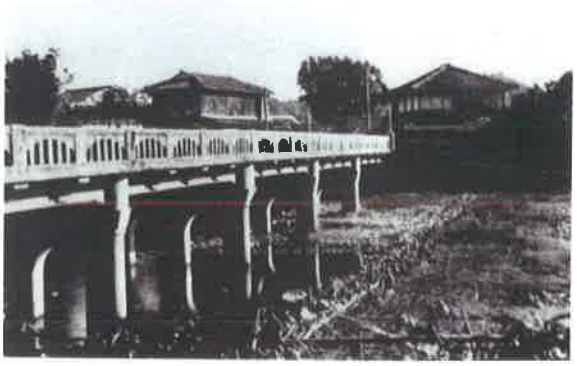
山田橋は，１９２９年（昭和４年）に完成した長さ６０．５m，幅５．８m，６連の鉄筋コンクリート製の橋です。

山田橋は，幹線道路にあったために，水害で流れない丈夫な橋をつくって欲しいとの地元の思いがあり，県議会議員であった瀬戸山良敏が力をつくし，建設が実現しました。建設には帖佐松原から出稼ぎの女性労働者などが大勢きて賑わったそうです。

当時の最高の技術で建設された山田橋は，デザインにも優れた工夫がなされ，親柱や高欄にみられるアーチ形状のデザインは，山田凱旋門を思わせます。橋のたもとに水明館など数軒の旅館があり，辺りも賑わっていました。山田橋の橋灯には夜になると電燈が灯り，行き交う人々を照らしていたそうです。また，戦時中はアメリカ軍の爆撃を受けたこともありました。山田小学校の運動会では，組体操で山田橋を表現したブリッジをしていたそうです。

地域の暮らしと発展になくてはならない大きな存在であり続けてきた山田橋は，山田の誇れる価値の高い地域資産です。

写真は山田橋（左 2016 年・右 1940 年）



山田旅館（楠木）と水明館（吉水）

太平洋戦争と山田

１９４５年（昭和２０年）７月２７日，山田はアメリカ軍の飛行機により空襲を受けました。アメリカ軍の飛行機は，爆弾と焼夷弾（家々を焼き払う爆弾の一種）を山田橋付近に落としました。そのため，焼夷弾が落ちた水明館旅館が全焼しました。また，爆弾が山田橋近くのキャンディー屋を直撃しました。

戦争は子どもたちの暮らしや学校にも深い影響を与えました。山田小学校（当時は山田国民学校）の校庭には防空壕が掘られていました。また，食料が不足していたため校庭は畑になっており，サツマイモや南瓜が植えられていました。

校舎は空襲でねらわれる恐れがあり危険なため，山に入って木々の間を教室がわりに勉強をしました。モールス信号や手旗信号を習ったり初歩の軍事教練をしたりという戦争に関係する内容が増え，学校園や実習地での畑仕事や縄をなうなどの作業も多くなりました。

山田川が大きく曲がり淵になっているところを小城渕と言いますが，そこに軍艦島を造り海洋少年団の訓練場としました。子どもたちは，そこで水泳をしたり川崖をよじ登ったりして身体を鍛えた他，手旗信号など海軍の基礎訓練をしました。

アメリカ軍の上陸が予想されたため，離島の種子島などから「学童集団疎開」といって本土に避難してきた子どもたちがいました。山田では島間国民学校の子どもたちを受け入れました。

やまだちゅうがっこう
山田中学校

太平洋戦争に敗れたことにより，日本は連合国軍最高司令官総司令部の占領下にあって，戦後改革の一環として教育課程の大規模な改編が行われることになりました（学制改革）。

そして，１９４７年（昭和２２年）からは，義務教育は，９年（６・３制）となり，全国的に新制中学校が発足しました。

山田中学校は，１９４７年４月１日に設立が認められ，同年５月２日に初めての入学式が行われました。しかし，あまりにも急なことで，校舎の建設が間に合わず，山田小学校の講堂を６つに区切り教室とし，講堂の控え室を職員室としました。６学級編成，生徒数２７５人，職員１１名での出発でした。山田中学校の校舎が落成し，移転したのは翌年の２月２５日のことです。

校歌が制定されたのは１９５７年（昭和３２年）です。

かどまつ
門松

今は正月の飾り物のように思われていますが，元々は歳神の依代（神霊のよりつくもの）の一種です。立てられる木は地方によって違いがあり，必ずしも松とは限りません。黒島神社の門松にはカシ（樫）が使われています。カシは古代から神聖な木であり，じょうぶで堅いことがめでたいとされました。

歳神とは，年取りの夜に家々を訪れ新しい命を与えてくれる神様のことです。

下名古馬場
松，葉のついた竹，ユズリハ，ナンテン

大山日枝神社
松，竹，サカキ

山田凱旋門
松，竹，笹，ナンテン，ユズリハ，葉ボタン

上の写真のように，門松には様々な様式があることが分かりますが，松と竹，ユズリハは共通します。松は神の宿る木とされ（神を待つ，祀る），和歌にもよく詠まれるように日本人にと

って親しみの深い植物です。竹は天を指して真っ直ぐに伸びる姿のよさ，ユズリハは，新しい葉が出てから古い葉が落ちるので，新旧相ゆずるという縁起を祝って飾られます。

さて，上の写真は知覧（左）と種子島（右）の門松（門木）です。知覧のものは，円錐状に盛ったシラスに，松，葉のついたままの竹，ユズリハを立て，シラスには薪を3本円錐状に置きます。種子島では，盛った真砂にマテバシイ，松，葉のついたままの竹，ユズリハを立て，根元を割木（薪）で囲みます。

おそらく，山田でも古くはこのような形で門松が立てられていたのではないでしょうか。姶良町郷土誌には次のような記述があります。

> 大晦日に門の両側にシラスを盛り，コサン竹を立て注連縄を張る。注連縄は新しいわらで作り，中央にダイダイ，ウラジロ，木炭，ユズリハを結びつけた。そして，門から玄関までシラスをまきすがすがしい気分で新年を迎えた。

おにびた
鬼火焚き

鬼火焚きは，正月７日に火を焚いて行う祭りで，九州地方で広く行われています。正月１５日に，宮中で火を焚いて祭りをすることは，平安時代の記録に見えますが，これが民間に広まったものです。全国的に行われる行事ですが，地方によって左義長，どんど焼きなど祭りの呼び方に違いがあります。

山田では，１２月中旬頃に山から太い孟宗竹を切り出して，田んぼにやぐらの骨組みを作ります。このとき先端に葉を残した大きな竹を中心に立てます。そして，細い竹を束にしたものでやぐらを囲み縄で固定します。７日夜に子どもたちや保護者，地域の人々が集まり，厄年や年男年女によって点火がされます。正月の門松や注連縄なども一緒に燃やします。その燃える火には災難（鬼）をはらう力があるとされ，体をあぶったり餅を焼いて食べたりすることで１年の無病息災を願います。また，竹の爆ぜる音は悪魔除けになるとされます。

こうした大切な故郷の行事が失われていくことは残念です。

七草雑炊（七日草粥）

7才になった子どもが，七草雑炊を，7軒の家からもらいお祝いとします。これはその子どもにふりかかった災難が，7軒に分けられて軽くなるためだそうです。また，雑炊の灰汁を取り，7才児の爪に塗ると，厄を払うと言い伝えられています。

山田では，ずしをもらいに行く家が橋を渡って行くところには行ってはならないとされていたそうです。（姶良町郷土誌）

古代より日本では，年初に雪の間から芽を出した草を摘む「若菜摘み」という風習がありました。また，中国には，旧暦1月7日に、7種類の野菜を入れた羹（とろみのある汁物）を食べて無病を祈る習慣がありました。これが日本の習俗と合わさって七草粥になったと考えられています。

雑炊の材料となる7種の野菜には諸説あり，地方によって違いもあります。

○雑炊の材料（例）

芹，人参，牛蒡，大根，もやし，里芋，昆布，米，モチ

3月節供，春の彼岸

3月は農業の上での重要な季節とされ，物忌み（神を迎えるために行いなどを慎むこと）や禊ぎ（水の力によって心身をきれいにすること）を行いました。これは，中国の古い習俗が日本に伝わったものと考えられています。

この頃に磯遊びといって海辺に出かけ潮干狩りや飲食をする習俗は日本全国にあります。また，野遊びや山遊びなどといって野外に出かけ，終日を遊び暮らすところも多いです。つまり，この日は家にいて仕事をしてはいけない神事の日だったです。日本の多くの学校で春に遠足を行うのも，この名残です。

3月の節供（3月3日）は桃の節句ともいい，女の子のためにご馳走を作り，雛人形を飾ってお祝いをします。もとは人の形をした形代（身代わり）に罪穢れを移して川に流したものが始まりで，紙や草で作った人形を手作りし，節供がすむと川や海に流していました。毎年飾った後に大切にしまっておくような立派なものが一般に広まったのは明治時代以降だそうです。

昔は女の子が生まれると，３月の節供に親類などが人形を贈り，そこの家では人を招いてお祝いをするものでした。高麗餅（小豆あんに砂糖，米粉を混ぜて蒸しあげる），煎粉餅（もち米を煎って砂糖蜜で練り蒸しあげる），よもぎ餅，小豆羹などを作りました。

高麗餅

煎粉餅

小豆羹

同じ日，農家では，牛馬の正月であるとして，牛馬に餅を食べさせ年をとらせました。

春の彼岸は，春分を「中日」とし，その前後各３日間を合わせた７日間です。日本独自の仏教行事で，８０６年（大同元年）に初めて行われたという記録があります。「彼岸の中日」には，祖先を敬い亡くなった人を偲んで，お墓参りなどをします。この日は，殺生（生き物を殺すこと）をしてはならないとされます。

お供え物として，ぼた餅（炊いた米を軽くついてまとめ，厚く餡で包む）を作ります。

山田川鮎の石焼き

（アイノイオのやっみそ）

江戸時代（１８４３年）に出版された三国名勝図会という本に，山田の産物として有名なものは茯苓，瓜呂実，桔梗，柴胡，前胡（漢方薬の材料），香魚（鮎），すっぽんと書かれています。

また，こんな言い伝えがあります。ある年の６月２９日，帖佐の領主であった平山氏が鮎の名所山田川原で宴を楽しんでいるところへ，蒲生八幡の夏越祭の手伝いから帰る途中の国分正八幡宮の神官たちが通りかかりました。かねてから仲の悪い相手なので，平山氏の家来達は神官達を馬から引きずり下ろしさんざん乱暴をしました。これが，原因で大きな戦が起こったということです。おそらく室町時代初めの頃だと思われます。

さて，山田川鮎の石焼きの作り方ですが，まず河原の石を焼きます（２時間以上）。その上に鮎をのせて焼き，身をほぐします。そこへ，次々に野菜（胡瓜，茄子，といもがら，玉葱，人参など）を入れ，味噌と砂糖を加え混ぜ合わせます。最後にしその葉を入れて出来上がりです。野趣あふれる鮎の石焼きは，昔から人々に愛されてきたふるさと山田の味なのです。

お盆

お盆は，旧暦7月15日を中心に，百味の飲食（様々な料理）を供え，祖先父母の霊を供養する行事です。仏教の盂蘭盆からきているとされます。宗派や地域によって作法や料理に違いがあります。

13日の精霊迎えから16日の精霊送りまでを期間とするのが普通であり，この間に盆棚という特別の棚を設けて精霊を祀ります。また，家の祖先の他に，身寄りのない霊（外んこさあ）などを別に祀ることもおこなわれます。

精霊迎えは，盆の精霊を家に迎える行事で，精霊を墓に迎えに行きます。迎え火を焚いたり提灯を下げたりします。

盆料理

お盆の間は，盆料理で精霊をもてなします。今では，このようなしきたり（慣習）を続けている家は少なくなりました。

13日夜

○特に料理なし。お茶と茶菓子くらい。酒（だれやめ）

14日朝　（ご飯の他に）

○呉汁　大豆，茄子，みがしき，牛蒡，南瓜，昆布，揚げ豆腐，こんにゃく

○油炒め　苦瓜，といもがら，豆腐

○酢の物　といもがら，大根　（焼き茄子の時もある）

１４日昼

○おはぎ（団子のところもある）

○白和え　豆腐，夏野菜，茄子，胡瓜，

１４日夜

○ご飯，汁

○煮〆　こんにゃく，牛蒡，高野豆腐，揚げ豆腐

○煮豆　大豆の新しいもの

１５日朝

○赤飯，呉汁

○刺身，こんにゃく，揚げ豆腐

１５日昼

○冷やそうめん

１５日３時茶

○油炒め　野菜，豆腐

１５日夜

○白だんご，小豆あん

１５日十時茶

○だんご，そうめん２～３本（土産）

１６日朝

○汁粉　旅立ち

十五夜・綱引き・相撲

旧暦８月１５日，庭に臼を出し，その上に箕をのせ，すすき・はぎ・くり・しおんなどを瓶にさし，ますに餅又は団子を１５個盛って供えます。また，秋の果物や里芋を茹でたものなどを供えて月の出を待ち，家中の者がそろって月見をします。

十五夜に綱引きや相撲などをするのは，南九州地方だけの伝統行事です。以前は山田（古馬場・新馬場・新町・星ヶ山）でも，新馬場通りで大綱引きが行われ，多くの人々が参加して賑いました。綱練りは，青少年が集まり，興文館（新馬場公民館）の前庭で行いました。また，このとき大きな草履が作られ興文館の側の大木に掛けられたそうです（こんなに大きな人がいるのだと悪魔を威し，村に入れないための呪い）。

山田の里かかしまつり

１９９４年（平成６年），山田郵便局の前に数体のかかしが立てられました。これは，当時局長をされていた米田弘さんが「過疎の進む地域を何とか元気にしたい。」という思いから局員や農協に呼びかけ，制作されたものでした。

それから２年後には，自治会，婦人会，各種団体等の協力を得て実行委員会が作られ，かかし作りは地域としての行事に変わりました。かかしの展示に加えて，山田地区公民館を会場に，地域の農産物を中心としたバザーや草花苗の無料配布も行われました。

１９９８年（平成１０年）には，「地域全体で参加するまつり」を目指して，山田校区社協が福祉活動の一環として呼びかける形で，自治会，小・中学校，各種団体による実行委員会が組織されました。小・中学校の子どもたちが作文と図画を応募するようになったのはこの年からです。

イベント会場が山田小学校に移り，現在のような形で行われるようになったのは，２００４年(平成１６年)のことです。

田の神

田を見渡せるあぜなどに石像を置き，米がよくできるように祭ります。また，小型の石像を一年交替で郷中の各家でまわしたり，自分の家一軒で石像を持っていたりします。

郷中の「まわり田の神」は，旧暦十月亥の日の「田の神講」で次の家にゆずり渡されています。その時，田の神の顔に真っ白く白粉でお化粧をしてあげます。

田の神は，盗んでもよいとされています。山田でも盗んでいって自分の所の米がよくできたら，米一俵つけて元の所へ返すという風習があったそうです。

日本は稲作を主とする農耕社会であったので，田の神を祭る習俗は大昔より年中行事の中心に置かれ，今日まで大切に伝承されてきました。ただし，地方によって神さまの姿やいわれ，行事の作法などに大きな違いがあります。鹿児島のような石像をつくって祭るのは，南九州だけの独特の習俗です。

中川原の田の神

内山田の田の神

大山東の田の神

講について

講は，あるものを祭る日として，各集落の郷中（班）ごとに受け継がれてきた行事です。現在では消滅してしまったものがほとんどで，かつての様子を知る人も数少なくなっています。

(1)天神講

学問の神様としての天神公（菅原道真）をお祭りする日です。

旧暦の正月，5月，9月の年3回が決められていましたが，昭和21年以降は，4月（1年生入学祝い），10月，3月（卒業祝い）の3回に変更されました。

天神講の始まりがいつ頃なのかは分かりませんが，江戸時代の中頃ではないかと考えられます。

昔は，14才以下の男の子たちが座元（世話役）の家に集まり，家の床の間に天神公の肖像画または書き写した和歌の掛け軸に学問の上達を祈った後，座元が準備してくれた食べ物を飲食するものでした。

昭和21年以降は，小学6年生（12才）が輪番で座元となり，米を持ち寄り鶏飯など作って食べた後，みんなで遊んでいたそうです。

ちなみに，男の子が賢く育つようにと正月に天神公の掛け軸を飾る風習は，（現在では）北陸地方だけにあるそうです。

(2)女子講

霧島市の石体神社の神様に赤ちゃんが無事に産まれますようにと祈願することがもとになっている祭りです。

この講の目的は，安産祈願とともに，農家の女性たちが一年の苦労を癒し親睦を図ることでした。

明治から大正にかけては，年２回行われていましたが，昭和になり１回だけ行われるようになりました。

参加できるのは女性（女子）だけで，男子の参加は禁じられ，女子講の日は家の留守番役をすることになっていました。

期日の決定は，「婦人の集い十二日祭りの日」に協議し，１０月末から１１月にかけて適当な日を決めていました。

座元（世話役）は輪番制で決め，飲食の準備は座元で行われます。妊婦さんの代表が石体神社に参拝し，帰り次第，祭りの宴が開かれます。三味線や太鼓まで登場し賑やかに行われていたそうです。

※石体神社に参拝した妊婦さんは，境内にある玉石（力石）を持ち帰り，無事にお産がすむと返納する習わしがあります。

(3)田の神講

旧暦の１０月亥の日に五穀豊穣（米などがたくさん穫れること）を祈って行われる行事です。

米１升，小豆（湯呑茶碗１杯）と酒代を座元の家に持ち寄り，餅つきを始めます。最初に，「牛の舌」といわれる形の餅を２つ作り，残りは小豆と一緒につきます。座元では，それで残った餅とり粉を田の神様の額に塗り，眉は墨できれいに化粧を仕上げ，床の間に牛の舌餅と一緒に飾っておきます。また，座元では鰯のほし魚とすり大根の用意をしておき，宴が始まる前に田の神様に礼拝し飲食します。飲食がすむと，田の神踊りが始まる習わしでしたが，今は行われていません。祭りがすみ次第，二人の男子で来年の座元の家へ田の神様と１尺５寸くらいの長さの竹筒を送り届けます。竹筒の中には，座元の名簿とその時のきまりが記入されたものが入っています。郷中によっては，田の神を座元が迎えに行き１年間預かる所もありました。

田の神講の料理は，餅と和え物がつきものですが，鶴田ではドジョウをとって和え物にしていました。

写真は「大山の田の神」１７８２年（元明元年）建立

(4)庚申講

十干と十二支を組み合わせてできる６０の数で，年や日を表す方法を十干十二支または干支といいます。例えば，２０１４年は甲午（きのえうま）の年に当たります。

十干	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸

十二支	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥

このうち庚申の夜には，中国より渡来した信仰で，「三尸」という虫が睡眠中に身体から抜け出て，天帝（神）にその人の日頃の悪い行いを報告するので寿命が縮むと信じられていました。そのため，庚申の夜は眠らずに語り明かし，三尸が天に上るのを妨げるというのが「庚申待」という行事で，貴族社会で行われていたものが，室町時代には民間に広まり**庚申講**ができました。（庚申の日は６０日毎なので，原則年６回行われる）

また，猿を神の使いとする信仰（山王権現・日枝神社）との結びつきもあり，申の神様をお祭りする日とされました。

山田では，明治３年の廃仏毀釈で庚申講の画像も取り上げられ一時禁止されましたが，明治中期に復活しました。古くは，正月・５月・９月の年３回，昭和２２年以降は年１回行われるようになりました。

黒島神社には「庚申供養塔」（１８１４年８月寄進）があります。庚申供養塔とは，庚申講が盛んに行われることを祝い，講の人々の長寿を祈って建てられた記念碑のことです。

ちなみに前回の庚申は１９８０年，次回は２０４０年です。

山田の歴史年表

時　代	年　号	出　来　事
縄文時代 弥生時代		○黒瀬，城，奈良袂のあたりに人が住み着いた。 ○米作りが始まり，村ができた。
奈良時代	７０８ ７１３ ７１４ ７２０ ７２３	○鈴木四郎政良が黒島神社を建て，上名黒瀬に邸を構えた。 ○大隅国がつくられ，大和朝廷の支配が強まった。 ○大分から豊留，山田，蒲生あたりに２００人の人を移した。 ○隼人が大きな反乱を起こし，１年半後に鎮圧された。 ○三世一身法　→　墾田永年私財法（７４３）
平安時代	１１５０頃 １１７９	○鎮西八郎為朝（源為朝）が上名に玉城山などを築いた。（伝説） ○源氏と平氏が争った。 ○平清盛が政権を握り，平氏が九州を支配した。
鎌倉時代	１１８５ １２７４ １２７６ １２８２	○鎌倉幕府が成立した。 ○元の軍勢が博多を攻めた。（元寇文永の役） ○山田は帖佐郡にふくまれ大隅正八幡宮の領地であった。 元軍を防ぐため博多に石の防塁を造るよう命じられた。 ○京都石清水八幡宮より平山了清が一族・家来８７０人余りを連れて帖佐へ移り住み，平山城を築いて山田を含む帖佐地方の領主となった。
南北朝時代 室町時代 戦国時代	１３５０頃 １４５４ １５２９ １５４３ １５５５ １５７７	○大隅八幡宮と平山氏との間に争いがあった。 ○島津季久が平山氏を滅ぼし，帖佐・山田の領主になった。 ○この頃，陽春院ができた。 ○島津氏が一族同士や他の領主と激しく戦った。 ○祁答院重武が帖佐平山城・山田城を攻め落とし，山田城主川越民部左衛門重博は討ち死にした。 ○この頃，正田院ができた。 ○種子島に鉄砲が伝わる。 ○島津氏が祁答院氏を破り，帖佐平山城・山田城を取り戻した。 ○島津氏が薩摩・大隅・日向の三州を統一した。
安土・桃山時代	１５９２ １６００	○梅北国兼が佐敷城で豊臣秀吉に反乱を起こし，殺害された。 ○関ヶ原の戦い

時　代	年　号	出　来　事
江戸時代	１６０３	○江戸幕府が成立した。
		○この頃，来福寺が建てられた。
	１７５２	○中津野用水路ができた。
	１７８０	○この頃上名の新開や開，中川原に串木野から人夫（土木技術者）をやとって開田が盛んに行われた。
		○この頃，西田に米屋，麹屋，油屋など６軒ほどの店ができた。
	１８１５	○西田の田の神がたてられた。
	１８６３	○イギリスの軍艦が錦江湾に来て，薩英戦争がおきた。
明治時代	１８６８	○戊辰戦争がおきた。
	１８６９	○寺や仏像がこわされた。（廃仏毀釈）
	１８７６	○山田小学校ができた。
	１８７７	○西南戦争がおき，山田からも多くの人が従軍した。鹿児島へ帰る途中の西郷隆盛が山田に立ち寄った。（腰掛け石）
	１８８８	○竹下六郎が山田村の初代村長になった。
	１８９２	○光楽寺ができた。
	１８９４	○日清戦争がおきた。
		○この頃から新町に商店ができはじめた。
	１９０４	○日露戦争がおきた。
	１９０６	○山田凱旋門ができた。
	１９０７	○水明旅館の吉水市蔵が駅馬車を始めた。
	１９０８	○山田郵便局ができた。
大正時代	１９１２	○山田に商店街ができ，町がにぎやかになった。
	１９１５	○興文館，弘道舎ができた。
	１９１６	○新馬場・古馬場・星ヶ山・新町に電燈がついた。
昭和時代	１９２８	○久永医院が新馬場にできた。
	１９２９	○山田橋ができた。
	１９３０	○山田小学校が今の場所に移った。
	１９４１	○山田国民学校と名前が変わった。太平洋戦争が始まった。
	１９４５	○山田がアメリカ軍の空襲を受けた。日本が戦争に敗れた。
	１９５６	○山田村，帖佐町，重富村が合併して姶良町となった。
	１９６６	○飛野分校が統合され，スクールバスが運行された。
平成時代	２０１０	○姶良町，加治木町，蒲生町が合併し，姶良市となった。

参考文献

『やまだ』　山田小学校研究部　編　１９６２年
『姶良町郷土誌』　姶良町郷土誌改訂編さん委員会　編　１９９５年
『鹿児島の棒踊り』　下野敏見　著　２００９年
『十五夜綱引きの研究』　小野十朗　著　１９７２年
『民俗探訪辞典』　大島暁雄・佐藤良博・松崎憲三・宮内正勝・宮田登　著　１９８３年
『民俗学事典』　民俗学研究所　編　１９５１年
『鹿児島県の歴史』原口泉・永山修一・日隈正守・松尾千歳・皆村武一　著　１９９９年

姶良市山田の歴史，民俗，芸能，暮らし

山田研究　**地域文化の記録**

２０１５年１１月１１日　発行

著作者　西田哲郎
発　行　姶良市立山田小学校